

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	本間 流星
論文題目	近代南アジアにおけるスーフィー伝統の継承と改革 —アシュラフ・アリー・ターナヴィーの存在一性論に見るイブン・アラビー学派の潮流—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近代南アジアの思想家アシュラフ・アリー・ターナヴィー (1943年没) の著作群の分析を通じて、同地域におけるスーフィズム思想、とりわけ「イブン・アラビー学派」と呼ばれる知的伝統の展開を明らかにするものである。本論文は、7章からなる本文と序章・終章で構成されている。</p> <p>第1章は、「存在一性論」の語をめぐるイブン・アラビー学派の系譜について論じる。イブン・アラビー (1240年没) 自身はこの語を一度も用いなかったが、ジャーミー (1492年没) がこの語をイブン・アラビーの思想的立場を表す術語として用いて、存在一性論の教義体系を確立した。そのイスラーム世界各地への伝播を追い、存在一性論が一枚岩の思想体系ではなく、地域・時代の文脈に応じて多様な意味をもった点を明らかにする。</p> <p>第2章は、南アジアにおける存在一性論の潮流を論じる。従来、南アジア・スーフィズム研究者が長らく依拠してきた「イブン・アラビーの存在一性論vsスィルヒンディー (1624年没) の目撃一性論」という二項図式を、近年の研究動向を基に否定し、スィルヒンディーの目撃一性論の影響を過大評価することなく、他の潮流にも等しく目を向けるべきことを主張する。また、南アジアの存在一性論者が「一切は彼なり」というペルシア語の表現を用いることで、ヒンドゥイズムやヴェーダ哲学との宥和・混淆を特徴とする汎神論的な存在一性論の理解を浸透させた点も指摘する。</p> <p>第3章は、ターナヴィーが生きた近代南アジアにおけるイスラームの潮流を概観する。当時のイスラームの危機に直面して、ターナヴィー自身の属するデーオバンド派などスンナ派ウラマー諸流派がイスラーム改革運動を興したが、宗派間対立により、近代南アジア・ムスリム社会は統合と分断の間を揺れ動いた。また本章では、ウラマー勢力・スーフィー諸流派に加え、モダニズムやイスラーム主義の諸勢力の影響力を指摘し、近代南アジア・ムスリム社会が「イスラームのモザイク」の様相を呈していたことを明らかにする。さらに、ウラマーが改革思想普及のための主要言語としてウルドゥー語を選択し、同言語が南アジア・ムスリムにとっての象徴的言語となった点に注意を喚起する。</p> <p>第4章は、「ウンマの賢人」の尊称で知られるターナヴィーに関する情報を、生涯・著作・研究史の観点から整理する。著作については、近代南アジアでムスリムらの象</p>			

徴的言語として普及したウルドゥー語による著述を重視し、自己改革の必要性をウルドゥー語で分かり易く説いたことを指摘する。研究史サーベイでは、彼が改革思想の中心的手段にスーフィズムを据えたことを明らかにする。

第5章では、ターナヴィーのイブン・アラビー擁護論を、南アジアを中心に検討する。イクバルなど近代主義的ムスリム知識人の敵対視に対して、彼はイブン・アラビー擁護の書をウルドゥー語で執筆した。ターナヴィーが自身の立場をスィルヒンディーのそれと同一視したことから、後者をめぐる言説の連続性が見られることを示す。

第6章は、ターナヴィーのスーフィズム観と存在一性論を論じる。彼にとってスーフィズムはシャリーアに包摂されるがゆえに、存在一性論のようなスーフィー形而上学も含め、その根拠の全てをクルアーンとハディースに見出すことができる。本章では、ターナヴィーが、通常は汎神論と理解される「一切は彼なり」というテーゼを神の遍在性と超越性の双方を保持する視座と見做すことで、汎神論とは明確に異なる存在一性論の理解を示したことを明らかにする。

第7章は、「一切は彼なり」に基づいたターナヴィーの存在一性論の更なる解明を目指し、彼の存在顕現の形而上学を考察する。絶対者の自己顕現の永続性や遍在性、その中で被造物や人間の役割といった点において、ターナヴィーはイブン・アラビーの影響を大きく受けており、こうした存在顕現論が遍在的な神観念を軸とする彼の存在一性論を支えていることを明らかにする。これらを踏まえて、近代南アジアにおけるイブン・アラビー哲学の伝承者を自認するターナヴィーは、その教説を忠実に継承し、簡明なウルドゥー語で定式化することによって、当時の南アジアの知的潮流に普及させようとした役割を果たしたと結論づける。